

第 I 部 研究の目的と経過

研究の目的と経過

1 古墳時代における八代海沿岸地域の重要性

九州島の西部には、2つの内海が南北に並んで存在する。北は有明海、南は八代海である。

有明海は、北を福岡県と佐賀県、西を長崎県、東と南を熊本県に囲まれた内海で、島原半島と天草下島のあいだの早瀬瀬戸で東中国海とつながっている。一方、八代海は不知火海とも呼ばれ、北を熊本県、南を鹿児島県に囲まれた内海である。その西側には天草諸島が南北に連なり、有明海とは宇土半島や天草の島々にはさまれた3つの海峡、北から三角ノ瀬戸、柳ノ瀬戸、本渡瀬戸によって結ばれている。したがって、天草諸島のうちの大矢野島や上島、下島は有明海と八代海の双方に面していることになる。しかし、私（杉井）にとって天草諸島は八代海の周辺地域であるとの印象が強い。

弥生時代以降においては、北部九州からの文化要素の伝播は、その多くが宇土半島基部地域までにとどまっている。たとえば甕棺や青銅利器などはその典型であるが、九州島の北部、有明海沿岸までの地域を主要な分布範囲とするのである。こうした考古資料の分布にみられる宇土半島以北と以南の差異が、半島西端から南へ連なる天草諸島を有明海ではなく八代海の周辺地域として私に認識させているのであろう。古墳時代においても、天草諸島北部地域とその対岸の八代平野は、円文を有す装飾古墳や天草産の砂岩で造られた箱式石棺が分布することなどの共通性をもつ。したがって、八代海という内海の周辺地域を一体としてとらえる視点には、十分な意味があるのである。

ところで、九州在住以外の考古学研究者がまず思い浮かべる熊本県の古墳は何であろうか。アンケート調査をしたわけではないが、おそらく宇土市向野田古墳や和水町江田船山古墳、装飾古墳では山鹿市チブサン古墳や嘉島町井寺古墳などの名前が挙がるのではないだろうか。これらはいずれも有明海側の古墳である。それに対し、八代海側の古墳で広く知られているものは数少ないとの実感がある。氷川町野津古墳群などは例外的な事例であろう。

しかし、八代海沿岸地域は、古墳時代の政治動向を考察するうえできわめて重要な地域である。

従来、古墳時代前期においては、宇土半島基部地域、すなわち有明海側と八代海側を画す地域に注目が集まってきた。それは、当該地域に前期の前方後円墳が数多く築造されているからであり、上述した宇土市向野田古墳はその1つの好事例である。ほかに三角縁四神四獣鏡が出土した宇土市城ノ越古墳も著名である。しかし、三角縁神獣鏡といえば、八代から芦北にかけての地域でも3面の出土が知られている。熊本県出土の三角縁神獣鏡は4面のみであるから、じつにその4分の3に相当するのである。しかもそれらは、福永伸哉による舶載鏡編年のB・C・D段階それぞれに属するものである（福永2005）。出土古墳が明らかでない点は残念だが、それら三角縁神獣鏡の存在は八代海沿岸地域の首長と中央政権との関係が一過性のものではなかった可能性を強く示唆する。

また、八代市鏡町に所在する前方後円墳、有佐大塚古墳で検出された円筒埴輪も重要である。詳細が報告されていない点に課題を残すが、手慣れた製作者によるものであることをうかがわせる資料であり、加藤一郎によって「畿内の資料と対比させることも可能な資料であり、川西編年Ⅱ期に位置付けることができる」と評価されている（加藤2008：p. 236）。これに対し、宇土市向野田古墳出土の円筒埴輪は、タタキが施された幅広の突帯をもつなど近畿地方中央部のものとはかけ離れた特徴をもち、おそらく土器製作にかかわる在地の人々によって作られたものと考えられる。つまり、前期の円筒埴

輪にかんする最新の正しい情報は、宇土半島基部地域ではなく、八代平野部にのみもたらされているのである。

古墳時代中期においても、八代海沿岸地域は、肥後型横穴式石室の発生、あるいは装飾古墳の発生において重要な役割を果たしている（高木恭1994、高木正1999）。そして古墳時代後期になると、八代海を臨む丘陵上に野津古墳群が築かれたのである。

さらに注意すべきであると思うのは、八代海沿岸地域の北部と南部で埋葬施設の様相に大きな差異がみられる点である。すなわち、その北部では前方後円墳が築造され、また主体部には竖穴式石室や横穴式石室などが採用された。一方、南部では、地下式板石積石室墓が多く分布するのである。つまり、八代海沿岸地域の内部には、前方後円墳をはじめとする古墳をさかんに築く社会とそうではない社会の境界域が存在している。いいかえれば、八代海沿岸地域は前方後円墳築造域の南西端にあたるのである。

このような地域的特性を有する八代海沿岸地域の古墳時代在地墓制の様相を明らかにすることは、古墳とは何かを考察することに直結し、さらには、日本列島における国家形成過程の議論にもかかわる重要な論点を提供することになると思われるのである。（杉井）

2 研究の目的と経過

以上のように、八代海沿岸地域に分布する古墳やその埋葬施設は、きわめて重要な研究素材である。しかし、現状は、それらにかんする情報が広く認知されているとはいえない状態にある。それは何より、未報告である資料が多い点、さらには正確な情報が提供されていないものがある点に根源的な原因がある。熊本県地域における後期古墳編年の定点の1つとされる宇城市国越古墳の正式な発掘調査報告書がまだ刊行されていない点に、こうした現状が如実に表れている。

このような問題意識のもと、八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の基礎的資料の整理を最大の目的として、本共同研究を企画した。共有の資料にもとづかない議論はどむなしなものはない。こうした現状を改善する第一歩を踏み出したいと強く思ったのである。

そこで、本共同研究の柱となる資料として、熊本大学文学部考古学研究室が所蔵する上天草市カミノハナ古墳群出土遺物を選択した。それを再整理し報告することを研究の中心にすえたのである。カミノハナ古墳群は、天草諸島で唯一、埴輪を樹立する古墳群である。またそこからは、独立片腸袂式長頸鏃や横矧板鋌留短甲などの鉄製武器・武具類が多数出土している。そのため、八代海沿岸地域のみならず、日本列島における古墳時代中期の政治動向を考えるうえできわめて重要な古墳群とみなされる。しかし、かつての発掘調査報告書（米倉編1982）に掲載された実測図や記述には少なくない誤



図1 共同研究のメンバー



図2 天草・竹島3号墳の調査

りがあった。それを訂正し、その作業によって得た成果を基礎として天草諸島の古墳動向を考察したいと考えたのである。

また、九州島側の資料として、宇城市に所在する松橋前田遺跡A地点から出土した埴輪を取り上げた。これも熊本大学文学部考古学研究室に所蔵されている資料であるが、これまで正式に報告されたことはなかった。しかし、ほぼ完形の状態に復元される円筒埴輪や朝顔形円筒埴輪が多数存在し、熊本県地域における窖窯焼成技術導入後の埴輪生産を考えるうえで重要な遺物であることは明らかであった。しかも、古墳へ樹立する以前の集積地に放棄されたような出土状況であり、また、これと特徴が酷似する埴輪がすぐ近くの松橋大塚古墳（前方後円墳、墳長79m）から出土している。つまり、古墳時代中期後葉における埴輪生産と供給の関係を具体的に解明することができる可能性を秘めた資料なのである。さらに、こうした松橋前田遺跡A地点出土埴輪の概要を示しておくことは、未報告のままとなっている松橋大塚古墳出土埴輪の整理作業が再開された際にも有用であると考えた。

さらに、上天草市史大矢野町編纂事業の一環として、2003年度から同市に所在する千崎古墳群の発掘調査を実施していたが、2006年度からはその調査を本共同研究のもう1つの柱にすえた。千崎古墳群は、上述のカミノハナ古墳群と同じ天草諸島北部に位置し、横穴式石室を内部主体とする円墳や箱式石棺など26基で構成されている。したがって、その内容を明らかにすることは、本共同研究の目的を達成するためにもきわめて有益であると判断したのである。ただし、千崎古墳群の調査成果については、毎年度末に発行している『考古学研究室報告』（三好編2007、三好・仙波編2007、山野・有馬編2008、一本・高濱編2009）に盛り込んでいるので、本書への掲載は省略した。

このように、本共同研究の目的は、具体的な考古資料の検討を通じて八代海沿岸地域の在地墓制のあり方、さらには古墳時代における当該地域の特性を考察することである。さらに、こうした活動を今後にも伝えていくことを目指した。そのためには、地域における文化財行政、そして考古学研究をリードする人材の育成が必要不可欠である。また、資料を再整理するためには、遺物を正しく評価する能力が求められる。このような認識から、本共同研究には、土器や埴輪、鉄製品などを専門分野とする若い考古学徒に多数参加してもらった。今後の彼らの活動に、少しでも役立つことがあればと考えたのである。また、これまで熊本県における考古学調査、研究を支えてこられた方々にも共同研究に参加していただき、種々のアドバイスをいただくとともに、若い世代が知らない情報を受け継ぐよう心がけた。未報告資料が多々ある熊本県においては、先学からの情報の伝達はきわめて重要で急がれるべき課題なのである。

熊本県における古墳時代研究にはまだまだやるべき課題が多いが、本共同研究で得た成果を基礎として今後へさらに進むことを期したい。
(杉井)



図3 カミノハナ古墳群の調査



図4 カミノハナ古墳群出土遺物の再整理作業

引用・参考文献

- 一本尚之・高濱美來編 2009「千崎古墳群第7次調査報告」『考古学研究室報告』第44集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-28
- 加藤一郎 2008「九州南部における埴輪の伝播と受容－唐仁大塚古墳表採資料の紹介をかねて－」『大隅串良 岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告No.3 鹿児島大学総合研究博物館：pp. 233-242
- 高木恭二 1994「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号 宮嶋利治学術財団：pp. 109-132
- 高木正文 1999「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集 国立歴史民俗博物館：pp. 97-150
- 福永伸哉 2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
- 三好栄太郎編 2007「桐ノ木尾ばね古墳実測調査報告」『考古学研究室報告』第42集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 37-54
- 三好栄太郎・仙波靖子編 2007「千崎古墳群第5次調査報告」『考古学研究室報告』第42集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-36
- 山野ケン陽次郎・有馬絢子編 2008「千崎古墳群第6次調査報告」『考古学研究室報告』第43集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-36
- 米倉秀紀編 1982『カミノハナ古墳群』2 研究室活動報告14 熊本大学文学部考古学研究室